

## 「只見 移住物語」

只見町役場 地域創生課 ユネスコエコパーク推進係

理学博士

### 【移住者のご紹介】

- ・お名前：遠藤 菜緒子様（47歳）
- ・ご家族：コン（猫1歳）、小夏（猫2ヶ月）
- ・いつ：2013年4月
- ・どこから：埼玉県 川口市（旧 鳩ヶ谷市）
- ・どこへ：只見町 大字 只見 字 <sup>あらまち</sup>新町（只見町定住者促進住宅）
- ・いましていること：ブナセンター指導員を経て、現在 ユネスコエコパーク推進係として  
ブナセンター庶務、ユネスコエコパーク事業の推進業務をしています。
- ・まえにしていたこと：東京理科大学のポストドクトラル研究員



「ふるさと館 田子倉」駐車場にて

### 【始まり】

東京理科大学のポストドクトラル研究員（博士号取得後に任期制の研究者として、大学に留まる若手研究者を支援する制度）のときに、生態学関連のメーリングリスト Jeconet を通してブナセンターを知り、ブナセンター指導員へ応募をしました。

ポストドクトラル研究員の時は、中高等教育のための教材開発をしていました。高校や大学で使えるような教育ツールの開発です。具体的に言うと生態学に関連する教材で、私は鳥類と人間との軋轢（あつれき）問題をテーマとした教材開発に取り組んでいました。

例えばカワウという鳥ですが、1940年代から1960年代にかけて環境汚染や生息地破壊により激減し、日本の中に繁殖地が2カ所しかありませんでした。この鳥が1970年代から1980年代にかけて急に増えたのです。急に増えたカワウは魚を食べることから漁業問題となりました。当然人間はカワウを「この鳥は悪い鳥だ」と言い、敵視するようになります。でも、カワウの存在が悪いとか悪くないと言うことではなく、カワウは自らの生態に従って暮らしているだけなのです。カワウが増え、人間は迷惑だと言いますが、そもそも人間のせいでカワウが減少したが、自然環境が良くなり回復してきたということなのです。人間が川を人工的にしたことによってカワウが増えやすい環境になってしまった、そんな背景もあります。

この様な人間と動物との軋轢（あつれき）を単に感情的に処理するのではなく、客観的に、科学的証拠を集めて理解できる教材作りを目指していました。当時の学習要領は「思考心」とか「判断力」を養い生きる力を育むことが求められていましたので、それにつながる、言い換えると多面的に物事を見る能力を養うための教材であり、動物を理解し生態学から人間社会の問題点を包括的に扱う教材を作ろうとしていました。

### 【家族】

只見町に住むことについて、母親から何か言われたことはありません。母は仙台にいて、私は今まで（仙台から）一番遠くて兵庫県、次に埼玉に住んでいたのです。そして福島県（只見町）となって、少しずつ実家、仙台へ近づいていたので母親は内心喜んでいたと思います。でも仙台までたどりつかずに、只見町に定住してしまいました。

### 【準備】

ブナセンターの指導員へ応募し、試験を受けるために初めて只見に来たのですが、前もってたいした情報を持たずに来たので雪の多さには驚きました。その年は積雪がとても多い年だったと思います。2013年2月下旬に採用が決まり、私は猫を飼っていたので猫が飼える住居を探しました。でも町に不動産屋さんはなく、『どこに住めばいいのかしら』と一瞬不安になったのを覚えています。

結局は、町に用意して頂いた定住者促進住宅に住むことになりました。そこでは猫は飼えないので実家に預けることになりました。実は、只見に来た当初私はもう一つ仕事を持っていました。仙台市にある東北工業大学で、週に2コマ非常勤講師をしていたのです。そのためブナセンターの指導員として週4日勤務し、残り3日間を仙台へ戻り、授業を行うという生活スタイルとなりました。猫は実家で暮らし、私は週の半分ずつを仙台と只見

で暮らしていました。

その後 非常勤講師を辞め、お世話になっている地元の方にお世話頂き、いま住んでいる一軒家を借りることが出来ました。猫と一緒に暮らしています。

### 【現在】

現在は町役場の職員となりユネスコエコパーク推進係に配属され、ブナセンターの庶務関係、ユネスコエコパーク事業の推進の仕事をしています。



野外観察会で参加者へ話しかける遠藤 博士（理学）

### 【変化】

移住して良かったと感じる事は、私生活が豊かになったことだと思います。

ここに来るまでは「研究」中心の生活でした。一日中「研究」のことを考えていて、もちろん休みの日もありましたが、休みの日もやはり「研究」に関連したことを考えているような毎日でした。こちらに来てからは山を歩いたり、畑を作ったり私生活の楽しみを見出せるようになりました。

只見に来た当初 4~5 年間、仙台の非常勤講師とブナセンターの両立で、只見のことを知る時間はほとんどありませんでした。非常勤講師を辞めて、一軒家に移ってから本当に只見ら

しい暮らしが出来るようになりました。畑を作ったりとか、近所の人と道端でお話をしたり、まち湯（只見保養センター「ひとつぷろまち湯」）に行くとか、そんな些細なことですが私にとっては新鮮で豊かな時間をすごせています。私は野鳥の生態に関する研究で博士号をとりましたが、現在は自分の研究はほとんどできていません。

私は「ゴイサギ」の生態研究をしていました。先日 只見で「ゴイサギ」の「**ねぐら**」を発見したのですが、ただ只見では「ゴイサギ」の数が少なく十分な研究データは集められません。私のこれまでの研究方法は、観察が基本で時間がかかるのです。観察の時間が長ければ長いほどデータを集めることが出来ます。

植物の研究では山を歩き、サンプリングをして、研究をすることもできるかもしれませんが、鳥類の生態学は一カ所に行ってすぐにデータを取れるというのではなく、限られた時間では観察に行っても正確なデータが取れませんので、やはり私の分野に関しては現在の状況では研究を続けることは難しいと考えています。

研究者として出来ることは限られると思いますが、いま只見の鳥類層を把握する程度のことにはしたいと感じています。

#### 【将来】

研究していた時の生活は本当に大変でしたので、今の日常生活が続くことを望んでいます。仕事では只見の町の人ともっと関わりを持ちたいと思っています。只見のことをもっともっと知って、その良さを町外に発信し、町の人にも再確認してもらえるような仕事がしたいです。私生活では、只見の自然と人の中でゆっくりと暮らしたいです。

#### 【不便】

来た当初は猫と暮らせないこと、雪の事が大変でした。最初の頃は仙台に通っていたので特に買い物に関しては困ったことはありませんでした。いまでも買い物で困ったことはありません。

#### 【健康】

実家に戻る際に、かかりつけのお医者さんへ行くようにしています。ビールが好きです。特に一日の終わりに飲む一杯のビールは幸せです。

#### 【アドバイス】

私は、只見に来てからある程度の時間をおいてから集落に入りました。また、それまでの間に親身にお世話をしてくれる地元の方々と出会い、お付き合いすることが出来ましたので苦労はありませんでした。近所の方と仲よくしようと心がけていました。これから来ら

れる方には、ほどほどの距離感を保ちながら、時間をかけて仲よくする（溶け込んでゆく）ことが良いと思います。

はじめて就いたブナセンターでは、付属施設の展示、講座、観察会を通して町の自然や文化について解説する仕事をしていました。そのため資料文献などを通して町の良いところをたくさん知る機会が持てました。私は比較的都会育ちなので、本当に自然と共に暮らす只見の人の暮らしは新鮮で、自然も珍しく、生態学の教科書で学ぶことを目で見る事が出来る、そこに感動しました。

都会とは違う価値観がありますが、それをこの町の良さと受け止めて、むしろ学ぶ姿勢でお付き合いしてみてください。

### 【印象】

初めて只見に来た時に、あまりの雪の多さに衝撃を受け、不安に思いましたが、只見で一冬を過ごしてからは只見で暮らしたいと思うようになりました。雪が好きなのです。冬になるとテンションが上がると言うか、ブリザードの中を歩いて出勤するのは気持ちいいですね。いちめんが真っ白になる、あの景色が大好きです。本当に只見は自然が良くて、いいですね。

2020年6月15日 職場にてインタビュー

インタビューアー 移住コーディネーター 生天目 博